

2212AIandShougi.pdf

2022.12 ブログ：「羽生九段の「A I によって向き合う、棋士の存在価値と意義」を読んで」、の詳細 （→ <http://www.1968start.com/M/blog/index3.html#2212b> ）

羽生九段の「A I によって向き合う、棋士の存在価値と意義」を読んで

中所武司

■このブログのきっかけ

2022.12.23 の朝日の記事「平成の覇者 令和の挑戦」のなかで、将棋の羽生善治九段が A I について語っている内容が興味深い。

<https://www.asahi.com/articles/DA3S15509778.html>

■記事内容の要約とコメント（→★）

【前半の記事の要約】

- ・将棋の羽生善治九段（52）は、王将戦の挑戦者決定リーグを6戦全勝で優勝し、藤井聡太王将（20）との王将戦七番勝負は2023年1月8日開幕予定。
- ・A I は、後手番特有の戦法である横歩取りの採用を劣勢と判断する傾向があるが、羽生九段は、2022年5月に1年半ぶりに横歩取りを採用し、その対局を含めてこの戦法で7勝2敗と星を稼いでいる。

【後半の羽生の発言「A I によって向き合う 棋士の存在価値と意義」の要約】

- ・A I に席卷された現代をどのように戦うか、どのように生きるかについて語った。
- ・藤井聡太さんとのタイトル戦は、やってみないと分からないのが正直なところです。
- ・今の私は、今の時代にどのようなスタイルが自分に合っているか模索を続けています。
- ・A I 研究では、いきなりヘリコプターで高所に連れて行かれ、山登りをしなさいと言われて途方に暮れるようなことがある。
 - 比重をどうするか、
 - 信用するかどうか、
 - 何を取捨選択するか、
 - 自分で考えることで何を生むか。模索には複合的な要素があります。

→★A I の示す次の一手を疑って、最善かどうかは自分で判断することかな。

- ・オリジナリティーを出すのが難しい今、棋士の存在価値と存在意義が問われています。
A I は人間が一生かけても作れない膨大なものを一瞬で作るわけですから、
何のために将棋を指しているか分からないことがあります。

→★棋士の存在価値と存在意義は、勝つことだけにあるのではなく、
A I も先人も気づかなかった独創的な手を指して勝つということかな。

- ・価値と意義について考えた時、人間はどのように歴史と物語を創っていけるか。
人の美意識や感受性は常に変わっていきます。美しいと思っていたものを醜いと、
醜いと思っていたものを美しいと思うように変わる。変わっていくものは何か、
ということに常に興味があります。

→★価値や意義は時代とともに変わるという一般論かな。
芸術の世界ではそうだが、将棋・囲碁の世界でいえば、定石が変わるということか。
囲碁の世界では、A I の影響を受けて、三々に入るケースが増えている。
将棋の世界では、A I の影響を受けて、後手の横歩取りが減っていたが、
羽生九段は、横歩取りを採用して勝率を挙げたとのこと。

- ・将棋の持つ膨大な可能性の中、人が見ているのはひとかけらですが、
A I が見ているのもひとかけらでしかない。
A I も探索しない空白の場所は必ず存在します。
空白に鉱脈を探す作業は、可能性がとてつもなく低い意味でギャンブルですが、
必ず空白の場所はあります。

→★これはもう哲学の世界かも。
数学の世界では、勝率が negligible small と判断したら、その先は探索しないので、
「A I も探索しない空白の場所は必ず存在します」が、
A I に勝つためには、その先の探索をあきらめてはいけないとは・・・

- ・私は 52 歳ですが、力が落ちたとは思っていません。
経験の中から本当の力として使えるものを見いだしたい。

→★これは、後期高齢者にも必要な人生哲学とも思える。

- ・一局の将棋は後悔だらけですが、後悔の多い人生こそ充実している。
甲乙付けがたい局面、難しい状況にたくさん出会っているということですから。

→★凡人は、後悔して落ち込むだけだが、そうではなく、
失敗から多くを学び、次につなげていけば、
「後悔の多い人生こそ充実している」ということになる。

- ・将棋は 400 年以上続いても答えは出ていないし、まだ可能性は残されている。
自分は幸福で幸運であり、時代に恵まれたとも思っています。

→★パイオニア精神を持ち続け、今も新たな道を切り拓こうとしているということか。

- ・王将戦が終ったとき、・・・納得していたい。
プロセスも内容も結果も納得できたらいいなと思っています。

→★以下のエッセイで対象とした文献の中では、
A I の囲碁ソフトが世界チャンピオンに勝利したことに関連して、
人間が負けたと考えるなら、人間が別の囲碁ソフトと組んで争うような
別の規則のゲームを考えればよいだけ、という記載があったが、
羽生九段は、決して「人間が負けた」とは考えていない。

【関連する過去エッセイの p. 6】

2022. 7『人工知能と言語』を読んで

<http://www.1968start.com/M/essay/2207AIandGengo.pdf>

以上